

京極夏彦講演集

「おぼけ」と「ことば」のあやしいはなし

はじめに

この本は、各地で行われた僕の拙い講演のいくつかを文字に起こしたものです。

僕は小説家です。独り黙々と文章を書くのが仕事です。平素より口を利く機会は極めて少ないわけで、喋ること——まして人前でお話することなど、得手であろうはずありません。ですから、長い間講演のご依頼などはお断りするようにしていました。

ところが折りに触れ講演の要請が舞い込むんですね。僕はデビューして間もなく水木しげるさんに召喚され、年に一度「世界妖怪会議」のパネラーとして壇上に並んでいましたし、日本推理作家協会のパーティの司会なども務めていました。また、小松和彦さんの研究会に参加させていただいたご縁から、大学のシンポジウムなどにお呼びいただく機会も何度ありました。そのせいで講演もやるのだろうと思われたのかもしれない。

しかしコメンテーターや司会、研究発表などと講演はまるで違います。まず、話すことがありません。僕には殊更人に伝えたい主張などありませんし、他者に何かを教示するほどの知見もありません。質問されれば答えますし、求められれば意見も言いますが、壇上で、一人で語る話題などないのです。ならば講演する意味もなろうと思いましたが、

ただ、あまり意地を張るのも大人げないので、ぼちぼちお受けするようにしました。

そんなある時、親交のある作家の方から「講演は研究発表や授業ではないのですから結論を出す必要はありません。話のところに聴衆が納得できるフレーズがあれば十分だと思います」と、言われました。また別の先輩からは「来てくれた人の年齢や性別などの属性によって話の内容を変えなくちゃ面白くありませんよ」とも言われました。

なるほど、と思いました。それ以降、一応演題は決めるものの（告知のために決めてくれと言われます）、話す内容は壇上で決めることにしました。付け焼き刃の知識など聞きたい人はいないでしょうし、原稿を読むだけなら話す必要はありません。自分の言葉で語らなければ伝わりにくいですし、その場で決めるのですから事前の仕込みもできません。

そんな僕の講演を、担当というわけでもないのに毎度聞きに来てくれる文藝春秋の編集者Mさんが、書籍化の企画を持ちかけてきました。「講演の恥はかき捨て」的にしてきた講演ですから、文章化などしたら大変なことになると言ったのですが、押し切られました。

と——いうわけで、この本には大したことは書かれていません。話すたびに内容は違うのですが、お化けについての講演を頼まれることが多いので同じ話題がくり返されているところもあります。喩えが古い場合は、お客さんに年配の人が多い時の講演です。もしかすると誤認や記憶違いもあるかもしれません。そこをお含みおきの上、お読みください。

お読みになったら、お忘れください。

目次

はじめに 2

第一談 世界の半分は書物の中にある 7

第二談 水木^{みずき}妖怪[”]は何でできているか 53

第三談 水木漫画と日本の妖怪[”]文化 93

第四談 「怪^{あや}しい」「妖^{あや}しい」「あやしい」話 119

第五談 柳田國男と『遠野物語』の話 151

第六談 河鍋暁斎はやはり画鬼である 189

第七談 幽霊は怖いのだろうか? 219

第八談 「ことば」と「おぼけ」との関係 265

第九談 日本語と「妖怪」のおはなし 291

装画 暁斎筆『とう尽くし画帖』より「五道」
装幀 野中深雪



東京国際ブックフェア

京極 夏彦氏
読書推進セミナー
会場

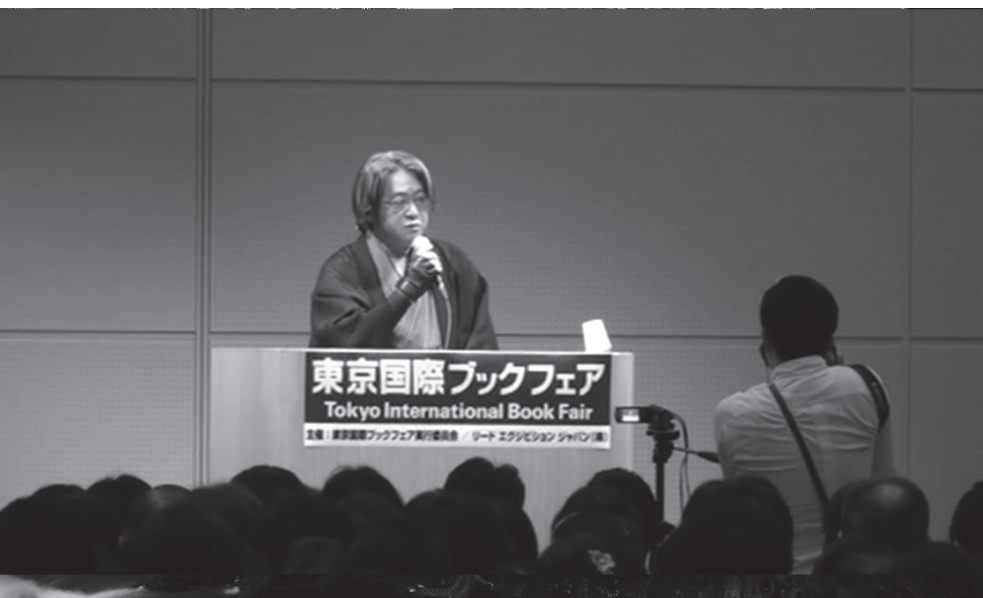
12:15

受付開始予定

※混雑状況により受付を
早める可能性があります

第一談
世界の半分は
書物の中にある

東京国際ブックフェア・読書推進セミナー
「世界の半分は書物の中にある」
於・東京ビッグサイト



未来も過去も存在しない

私たちはどんな年をとっていきます。刻一刻、一秒一秒、必ず老^ふけていきます。若くなる人はいません。最近ではアンチ・エイジングなどといって、実際の年齢よりも若く見せようとする人が増えているようですが、いかななものでしょう。シワをなくしたり、毛を増やしてみたり、着飾って若づくりをしてみたり——人には年齢を重ねたなりの良さというものがあるわけで、私は年相応が一番美しいあり方だと思うのですが。年寄りの冷や水——これは少し違いますが、いずれ失^なくなったものは失くなったものとして受け入れる姿勢が大事だと、私は思います。

未練がましく「時間を巻き戻そう」などと考えるのは、あまりよろしくない。

私たちが存在する世界では、時間は一方通行に進み、絶対に逆行しません。昨今いろいろな発見がありまして、「もしかしたらタイム・マシンができるのではないか」というニュースが流れたこともありましたが、あれは計測間違いだっただけです。将来的にタイム・マシンの製造が実現したとしても、いまこの瞬間を生きている私たちは、時間を逆行することはできないですね。私たちは昨日を見ることはできないんです。それどころか、「ついさつき」も二度と見ることはできません。この大展示会場に入ったみなさんも、会場に入る前の状況を見ることは絶対にできません。

いや、ほとんどの人がそんなことは考えないと思いますが。歩いている時に、「左足を出したら、もうこの左足を出す前の自分じゃないんだぞ」なんて思いながら歩いている人はいないでしょう。

私たちはインターネットを使うことで、日本中のこと、世界中のことを瞬時に知ることができるようになりました。そのため、一瞬でいろいろなことが体験できるよう——錯覚に陥おちいっています。

しかし実際には、目の前にあるものしか見えませんし、空気の振動によって伝わってくる音しか聞こえませんし、手が届く場所にあるものしかさわれません。

つまり、手を伸ばせば届く場所より離れた距離にあるものにはさわれない、ということです。私たちは『怪物くん』の怪物太郎や、『ONE PIECE』のルフィではないのですから、手足を伸ばすことはできないんです。

私たちは、体感としては非常に狭い範囲のものごとしか知ることができません。そのうえ後戻りもできないのです。つまり、「いま」しかないということですね。

私たちは生活の中で、過去、現在、未来という言葉を当たり前のように使いますね。

しかし、未来は、まだありません。ないものは知ることができませんよね。よく「未来を作る」という表現を耳にします。まあ、いまがなければ明日もないので、言いたいことはわかります。しかし、作るといっても、正直明日のことなんてわかりません。

今日は微妙な天候ですが、実際、こうして窓のない建物の中にいる私たちには現在の天気が晴れなのか雨なのか、それすらもわかりません。見えないし聞こえないんですから、外がどうなっているのかわかりません。わからないんですから、一歩外に出たら密林のように木が生えて^はいるかもしれないんですよ。あるいは、建物も何もかもなくなつて砂漠になっているかもしれない。

もちろん、そんなことはないだろうと普通は思うはずですが。まあ、ありませんね、そんなことは。しかし、何故あり得ないとわかるのでしょうか。

それは、誰もがこの会場に入るまでの間に、外の景色——東京の街並を確認しているからです。建造物に入って出ただけで都会がジャングルになったり砂漠になったりすることは常識では考えられないと、私たちは知っています。SF小説でもない限りそんなことはあり得ません。そして、それは正しい認識ですね。でも、そう判断した根拠となっているのは、「さつき」という過去です。

過去の経験を元にして、私たちは現在を知り、未来を予測しているということがよくわかります。ただおっと生きているだけでも、過去と現在と未来は必要なんです。未来の話というと、ハイテクな車両や鉄腕アトムのようなロボットが空を飛んでいた、宇宙ステーションで逆さまにご飯を食べていたりするような場面を考えがちなんです。でも一秒後だって未来ですし、一秒前はもう過去なんです。私たちは過去、現在、未来という仕組みを持っていないと、生きていけないんです。

ところが、先ほど述べたように未来は存在しませんし、過去もすでにありません。戻ることすら早送りすることもできないんですね。あるのは現在だけです。それなのに、私たちは過去と未来という存在しないものを前後にくっつけることでしか、この世の中を理解できないし、生きていけないうえです。

時間は説明できない

未来も過去も、時間という概念なくしては得られないものです。しかし、そもそも時間とは何なのでしょう。時間について納得のいく説明ができる人はいるのでしょうか。

私は上手に説明ができなかったので、それらしい本や小難しい本をたくさん読んでみたことがあります。実にいろいろなことが書いてあり、逐一納得もしましたが、結局よくわかりませんでした。「簡単だ、時間とは時計の針が進むことじゃないか、いや朝が夜になることじゃないか——」と言われそうですが、それは時間が経つからそうなるというだけの話なのであって、時間自体の説明ではありません。私たちは時間というものを説明できないのです。何故なのでしょう。

何だか小難しい話を始めそうだと思われた方は、ご安心ください。私は誰でも考えつくようなことしかお話しできません。

私たちは、一般的には三次元に存在しているとされています。三次元とは幅、高さ、奥行き、三つの座標軸で表すことができる空間です。線が一次元、面が二次元、立体が三次元、というふうに受け取る人が多いのではないかと思います。そして、三つの次元に時間軸を加えると、私たちは四次元で生きていると考えることもできます。